

第1回千葉県環境研究センター基本計画検討会議における意見と対応

参考資料1

NO	発言委員	第1回論点	発言（要約）	関連資料	関連ページ	関連項目	対応
1	廣田委員	論点3	防災性について、能登半島地震では避難施設が壊れた。危険な場所から外すのが第一条件だと思う。	資料1-2	—	災害リスク	候補地の比較検討において、災害リスクを重要項目としました。
2	廣田委員	論点4-1	環境研究センターのこれからの役割を考えたときに、現在のセンターの位置を起点として考えること、都心部に建てることについてのリスクについても検討すべきでないか。	資料1-2	—	交通CO2	これからのセンターの役割として、支援・発信・交流の拠点となることを基本理念に掲げており、候補地の中でより利便性の高い場所であることは重要な評価視点であると考えています。 また偏った評価とならないよう、可能な限り多角的な項目で評価検討を行いました。
3	佐々木委員	論点4-1	省エネをうたうのであれば、公共交通機関が不便な立地だと車でのアクセスが増え、CO2の排出が増えることを考慮すべきである。列車本数が十分かつ駅から徒歩圏内など、公共交通機関の利用への抵抗が小さい場所が理想的。	資料1-2	—	交通CO2	御意見を参考に、『交通CO2排出量』を重要項目として加え、県民・職員それぞれについて優位性を比較検討しました。
4	近藤座長	論点4-1	検討に当たっては、職員の通勤だけでなく、人口分布や他機関との交流、今後の道路整備計画、重点的に調査研究すべきスポットなどが項目としてあげられているといいのではないか。	資料1-2	—	連携容易性	『関係機関との連携容易性』を重要項目とし、連携が期待できる農林総合研究センターと近接していることを高く評価しました。
5	廣田委員	論点2	県以外の環境関連施設にどのようなものがあるのか、それらとの連携可能性についても議論が必要だと思う。	資料1-2	—	連携容易性	今回の資料では、県庁で連携可能性が考えられる機関（資料2p.8）や大学、企業等の概略のみ記載しました（資料1-2「連携可能性」）。 具体的に連携可能性のある大学、企業等については、今後さらに調べていきます。
				資料2	8	基本理念1	
6	近藤座長	論点1	少子高齢化・人口減少の中、災害や複雑多様化する行政課題に対処するためには、行政職員も含めた人を相手にする、人を中心にする、という共通認識が大事だと思う。	資料2	—	—	設計に留まらない、センターや県の環境行政全般の方向性に関する重要な提言として、「はじめに」など総括的に記載箇所の内容として参考にさせていただきます。
7	近藤座長 (追加意見)		基本理念1「調査・研究の質と研究員の意欲を向上させる」の表現は、研究所の存在が向上をサポートするという本来の意図から離れて、強制的・受動的な印象を受けるので修正したらどうか。	資料2	8	基本理念1	御意見を踏まえ、「調査・研究の質と研究員の意欲が向上する」に修正しました。
8	廣田委員	論点2	第3章は、第2章の基本理念と比べて、一気に詳細に入り込んでいる気がする。その前に、現在の県の施設のプラン、80年後の形、機能変更の可能性などについて、もう少し抽象的な言葉での説明を挟むとともに、現在の施設のプランというものを資料として示してほしい。	資料2	8,9,14	基本理念1,2 第4章(冒頭)	御意見を踏まえ、第2章基本理念において、理念の背景や理念の実現に必要な機能を、第3章につながるよう総論的に加筆しました。 また、県の施設のプランについては第4章の冒頭に記載しました。
9	廣田委員	論点2	公共建築は、行政側の立ち位置だけでなく、コミュニティの立ち位置で検討しなければならないと思う。	資料2	9	基本理念2	基本理念2で表現した内容が実現できるように努めていきます
10	近藤座長	論点2	環境分野ではシチズンサイエンスが重要になっていく。それを支えるデータセンターとしての機能をもてると理想的。	資料2	9	基本理念2	県民ニーズを踏まえた情報発信が重要であることを記載しました。
11	石川委員、 桑波田委員	論点2	土日祝日の運用の検討や、学校の授業での関わりなどがあると、県民に広がっていきやすいと思う。県の環境研究センターであることが、一般の方にもわかるような建物になるといい。	資料2	9	基本理念2	土日祝日の運用は業務運営の参考とさせていただきます。広く県民に認知されるよう、まずはハードとして基本理念に掲げた環境保全のシンボルとなる施設を目指していきます。
12	桑波田委員	論点2	環境学習について、行政が一方向的に与えるのではなくて、行政と県民がお互い一緒に作り上げるのも面白い。	資料2	9	基本理念2	基本理念2に掲げる「人々が集まる拠点」が実現することにより、様々な交流の可能性が出てくると考えています。
13	伊香賀委員	論点2	他の研究機関や、自治体の庁舎でも、最近の建物は機能も先進的で相当しっかりした計画を建てている。事例調査はさらに行った方がいい。必要なグレードを確保するために予算がどれくらい必要か、の検討材料になる。	資料2	10～	各項目の参考イメージ等	御意見を踏まえ、第1回検討会議後に調査範囲を大学等研究機関の先進事例に広げるとともに、職員が実際に京都の2研究施設を視察するなど、先進事例や近年の事例について確認し、今回の第3章、第4章の参考としました。 なお、事例調査は今後も進めていきます。
14	佐々木委員、 石川委員	論点2	書類の電子化は民間でも進めている。人的コストや、セキュリティ・災害リスクを考慮すると、サーバ機能はアウトソーシングの方がいい。	資料2	10	(1)ウ	県の情報セキュリティポリシー等との整合をとりつつ、可能な範囲でアウトソーシングを検討してまいります。 (記載は変更なし)

第1回千葉県環境研究センター基本計画検討会議における意見と対応

参考資料1

NO	発言委員	第1回論点	発言（要約）	関連資料	関連ページ	関連項目	対応
15	佐々木委員	論点3	太陽光発電設備について、導入時のCO2排出が指摘されている。更新も含めたライフサイクルアセスメントの観点から適切な方法を検討するとよい	資料2	13	(4)ウ	太陽光発電設備など、建築資材以外の設備についても、ライフサイクルカーボンの観点から導入を検討するよう修正しました。
16	伊香賀委員	論点3	ライフサイクルカーボンの削減について、可能な限り発注要件に加えていただきたい。	資料2	13	(4)ウ、エ	環境保全のシンボル庁舎となることを可視化するため、ライフサイクルカーボンや環境配慮性能等が評価可能なCASBEEによる適切な目標の設定と評価を行うよう必要な機能として追加しました。 基本計画の内容は、基本設計の発注条件として検討されます。
17	伊香賀委員	論点2	ライフサイクルカーボンの削減は、国内外で重視されている。環境行政の研究機関が、自らの建物でそのような配慮をできていることを県民にアピールする必要がある。			(4)エ	
18	伊香賀委員	論点3	建物の環境配慮性能を高めるに当たり、取組が数値化される、CASBEE（建築環境総合性能評価システム）において評価することを検討してはどうか。				
19	近藤座長、石川委員	論点2	職員の安心が確保できるよう、陳腐化を防ぐ意味でも、大きなスペースをパーティションで区切って、部屋割りが自由に作れると思う。	資料2	14,15	4.1(2)①	構造のフレキシブル性を基本としながら、パーティションによる随時更新性にも配慮します。 なお計画案には建物構造をフレキシブルとする一例として、スケルトン・インフィル工法の考え方を更新性に記載しました。
20	佐々木委員、廣田委員	論点3	80年間の長期使用、今後生まれる新しい技術の導入可能性等を考慮し、建物の構造そのものを含めたフレキシブルな設計にすべきである。				
21	石川委員	論点3	現状のセンターは維持管理が行き届いていないように感じる。維持管理しやすい施設にした方がいい。	資料2	16	4.1(2)④	まずは新たな建物における、維持管理の容易性について十分検討していきます。
22	石川委員	論点3	防災性について、いざというときの避難場所としての機能があると、近隣の方々に安心してもらえるのではないかと。	資料2	17	4.1(3)③	避難場所としての位置付けについては、地元市等の災害対策方針との整合性を検討する必要がありますが、まずはセンター自身が防災性の高い建物となるよう検討していきます。
23	伊香賀委員	論点3	「研究に支障のない室内環境の確保」では物足りない。研究機関として良い研究ができるよう、ポジティブな表現であって欲しい。	資料2	19	4.1(3)⑧ 4.3(2)②	御意見を踏まえ、現状維持的な表現を機能強化に向けた前向きな表現に修正しました。
24	廣田委員、伊香賀委員、桑波田委員	論点3	環境保全のシンボルとして、Nearly ZEBでは物足りない。民間・公共問わず、Nearly ZEBは当たり前になりつつある。ZEB化は推進ではなく実行の段階だと思う。電気自動車との組み合わせや、後々の設備更新で将来的に達成するなど、予算との兼ね合いも考慮しながら『ZEB』を目指してほしい。	資料2	20	4.2(1)	表題を「ZEB化の実現」としました。 また、『ZEB』（100%超）を視野に入れて検討するよう内容を修正しました。
25	佐々木委員	論点3	公用車については、EVの動向を見極めつつ、ハイブリッド等も含めて、現時点で最適なものを導入すべきである。	資料2	21	4.2(2)②	御意見を踏まえ、県の方針に沿って、ハイブリッド車を含む最適な公用車を導入するよう記載しました。 また、水素自動車など今後の環境先進車を環境PRと研究目的において導入する可能性についても記載しました。
26	伊香賀委員、近藤座長	論点4-1	車でのアクセスが前提となる場合、環境のシンボルとして、車の環境性能についての考慮があるとよい。その際は、移動の文明的・人権的要素、今後の環境性能向上、カーボンオフセットなどを含めて考慮するとよいのではないかと。				
27	近藤座長	論点4-1	車のCO2排出と、移動の文明的・人権的要素、車の環境性能向上、カーボンオフセットなどを踏まえて、理念を打ち出せるとよい。				
28	廣田委員	論点3	公用車はシンボリックな機能に加えて、災害時の電気供給に使用するなど、車の利用スタンスを示すのが重要。				
29	石川委員（追加意見）	論点3	今回の話で「予算」の話が全く出てこなかった。会議の最後に他の委員から意見にもあったが、予算をオーバーしたときには、機能または性能、その他のどこから何をどう削って予算を達成していくのか、優先順位などを予め明確にしておく必要があるのではないかと。	資料2	22	4.2(2)③	省エネルギー手法の選定に関し、「費用対効果の側面を加え、研究施設という観点からも総合的に検討し選択」することを記載しました。次回の検討会議において、「第7章 概算工事費」をお示しする際に、改めて優先順位の考え方をお示しします。
30	近藤座長	論点2	温暖化対策は、私たちの心の在り方や、都市と農村の構造を変えることで対応していくのも必要で、環境研究センターがその拠点となり、生態系サービスを活かして対応していくシンボリックな構造をもてるとよい。	資料2	23	4.2(2)⑤	建設候補地選定前のため、未利用エネルギーや生態系エネルギーの活用について、今回は一般的な地中熱の活用について記載しました。 敷地が広く自然的環境がある、農林総合研究センターの土地を想定して検討可能性がある省エネ技術があれば改めて御意見をいただきたく思います。
31	近藤座長、伊香賀委員	論点3	省エネ技術について、太陽光、地中熱、木くずなどのバイオエネルギー、周辺の里山とのリンクなど、シンボリック化できるようなものも含めて、いろんな可能性を検討してほしい。				
32	廣田委員	論点3	木材利用はメンテナンスが問題になるので、きちんとした計画が必要。	資料2	24	4.3(1)③ア	木材利用については、使用可能な範囲において、更新性・維持管理性などを配慮しながら最大検討していきます。
33	近藤座長	論点3	木は人の心に訴えるものがある。メンテナンス等の課題はあるが、木造についても検討してほしい。				
34	廣田委員	論点2	発注に向けて要求条件を整えるにあたり、室名称によらないゾーニング等で提示する部分や、共用部と専門室群とのバランスなど、室構成をまとめる前の段階の検討が見えづらいと感じる。	資料2	—	—	次回の検討会議において、室構成やゾーニング（第5章）をお示しするに当たり、第4章までの記載との整合性や流れに留意していきます。